

宮本憲一先生の講演と水田洋先生

写真は中部高等学術研究所共同研究「人文学の再構築」の第10回研究会案内。7月4日の「京都研究会」で宮本憲一先生からお聞きして、申し込んでズームで参加した。3時間にわたる研究会から多くのことを学んだ。

まず宮本先生から「環境経済学の方法論と課題—研究史から」と題して問題が提起された。事前に9ページの詳細な報告原稿と資料が送付されていたが、パワーポイントにより論点を明確にして報告された。

報告は1 共同社会的条件の政治経済学、2 戦後日本公害史論、3 地球環境問題、4SDGsは地球危機を救えるかと続いた。先生の研究の歩み、とりわけ公害・環境問題の理論、そして最近の地球温暖化に象徴される地球危機、SDGsの評価と課題など多岐にわたり、それぞれの問題に論点が提起され示唆に富むものだった。先生はあまり疲れた様子もなく、100分にわたり話され、あらためて先生の集中力に感心した。

報告のあとの質疑も興味深かった。司会の安藤隆穂教授が、宮本先生の社会資本研究のきっかけを問うと、先生は次のように語る。四日市コンビナート調査で経済学の誤りを実感し、大きな怒りを感じた。当時の社会資本充実政策批判と社会的費用論に向けて研究を進めた。都市論については、総体として捉えるマンフォードのエコロジーの視点が重要ではないか。四日市のまちづくりについても、参加者との質疑があった。じつは2007年7月21日に「四日市環境再生まちづくり提言の集い」があり、事務局長をつとめた。宮本先生が基調講演されたが、港を活かしたまちづくりなどを提言した。集いを思い出しながら、質疑に耳をかたむけた。イタリアのナポリからも参加があり、G20や日本の環境政策のあり方も話題になった。

研究会で何とも嬉しかったのは、水田洋先生にズームをつうじてお会いできたことだ。水田先生は102歳になられるが、「宮本くんは私の一番弟子だ」と語られ、今日報告を聞いて勉強していきたい。やらねばならないことがあると。宮本先生は水田先生の言葉を聞いて、まだ引退できない。水田先生から、社会との関係で形成される、全体としての人間の思想を学んだと、宮本先生は感慨深く語った。

写真は2016年9月4日に京都二条で開催された宮本先生「日本学士院賞」祝賀会で、宮本先生ご夫妻の横で挨拶される水田先生。このとき先生のご自宅に伺い、京都の会場までご一緒した。車中で先生から、北杜夫さんや加藤周一さん、名古屋オリンピックのことなどをお聴きできた。水田先生は毎日新聞6月11日夕刊「幻の名古屋五輪 東京への教訓」で、市民それぞれが声を上げないといけないと語っていた。



(2021年7月11日)